「風流の」歌仙注釈（下）

深沢眞二

――要旨

芭蕉が、元禄二年（一六八九）四月二十二日から翌日にかけて、須賀川の等躬、および同行者の曽良と三吟で巻いた「風流の」歌仙の名残折十八句を注釈する。これは、本誌前号の（上）の、初折十八句の注釈に続くものである。

（承前）

本誌前号の（上）に引き続き「風流の」歌仙の名残折を注釈する。まずは『俳諧荵摺（しのぶずり）』によって濁点を加えず掲出する。36の振り仮名は底本のママ。

19 やま鳥（名）の尾にをく年やむかふらん　はせを
20 芹掘計清水つめたき　等躬
21 薪木引雪車一筋の跡有て　そら
22 をの〳〵武士の冬こもる宿　芭蕉
23 筆とらぬ物ゆへ戀の世にあはす　等躬
24 宮にめされし憂名恥かし　曽良
25 手枕にほそき肱をさし入て　はせを
26 何やら事の足らぬ七夕　等躬
27 住かへる宿の柱の月を見よ　そら
28 薄あからむ六条か髪　芭蕉
29 剪樒枝うるさゝに撰残し　等躬
30 太山つくみの声そしくるゝ　曽良
31 □（ウ）淋しさや湯守も寒く成まゝに　はせを
32 殺生石の下はしる水　等躬
33 華遠き馬に遊行を道引て　そら
34 酒のまよひの醒る春風　芭蕉
35 六十の後こそ人の睦月なれ　等躬
36 蚕（コ）飼する屋に小袖かさなる　曽良

注釈の基本方針と先行注釈の略称については（上）を参照願う。ここからの掲出本文には適宜濁点や振り仮名を加えている。

18　悲しきほねをつなぐ糸ゆふ　　曽良

19　やま鳥の尾にをく年やむかふらん　　はせを

【式目】春（年やむかふ）。動物鳥（やま鳥）。「名」は名残折に入るというしるし。曽良の俳諧書留では「山鳥の尾にをくと□やむかふらん」、□は「ら」とも「く」とも「ゝ」とも見える仮名一字である。おそらく「し」を雑に書いたのだろう。

【付け】

高野山の連想による付けである。前句の背景の『撰集抄』の、高野山で独り修行する西行が人骨をつないで人間を作ろうとしたという西行伝説（江戸期の流布本である慶安三年版本では巻四第十六話）から、芭蕉自身が前年に高野山にて詠んだ「父母のしきりに恋し雉の声」へと、連想を展開した。「父母の」句は、『玉葉集』巻十九・釈教歌の、

山どりのなくをききて　　行基菩薩

山鳥のほろ〳〵となくこゑきけばちちかとぞおもふ母かとぞおもふ

を踏む（『夫木和歌抄』巻二十七・雑部九動物部にも所収）。この歌は『方丈記』にも「山鳥のほろ〳〵と鳴くを聞きても父母かと疑ひ」と使われている。また、春の景物である「糸ゆふ」を見て「年やむかふらん」と推量するかたちの付けで春の三句めとした。

【句意】

山鳥はキジの一種である。その尾は長く、黄白地に白・黒・褐色の斑点が入っている。山鳥の尾の斑点は年毎にその数を増すものでその数により年齢が解ると、【駑】は指摘する。資料的な裏付けが取れないのだが、とりあえずは【駑】に従い、「山鳥の尾にをく年」とは「山鳥の尾には年が置かれたかのように斑点が見られる」ということと解しておく。また、後半部「年やむかふらん」は「新年を迎えてまた一つ年を重ねるのであろう」ということ。こちらが主文で、「山鳥の尾にをく」は文飾とすべきだろう。「山鳥の尾にまた一つ斑点が置かれるように、また一つ年を迎え、年齢を重ねる」。「山鳥の尾」は「長々し」を引き出す序詞でもあるから、「長く年を経た」つまり「老いた」ことを暗に示していると考えられる。

19　やま鳥の尾にをく年やむかふらん　　はせを

20　芹掘計清水つめたき　　等躬

【式目】春（芹）、植物草（芹）、水辺用（清水）。

【付け】

前句が「新しい年を迎える」話題であるところから、正月七日「人日」の「若菜摘み」の行事を連想して、七草の一つの「芹」を付けた。七草がゆの菜を刻む際に囃すまじない「七草なずな、唐土の鳥と、日本の鳥と、渡らぬ先に」により、前句の「鳥」からの連

想も効いている。また、『拾花集』と『竹馬集』、それに『類舩集』にも「雉子→若草…雪間」の寄合語があり、「山鳥」から「雉子（きゞす）」の語を介して、雪残る初春の若菜摘みへ連想を働かせたかとも思われる。

【句意】

「ばかり」を、【正】は程度の意に解して「早春の冷たく感ずる程の水につかつて芹を掘る」とするが、それ以外の先行注は「芹を掘るのみだ」のように限定の意に取っている。右に述べたように人日の「若菜摘み」が意識されているとすれば、芹「ばかり」は手に入るが七草のうち他の六つはまだ早いと解するのが自然だろう。したがって限定の意と取り、他の野草を摘むにはまだ早く、「芹だけを掘っている、冷たい清水のあたりで」と解釈する。等躬は、陸奥の春の到来の遅さを詠んだものと思われる。

20　芹掘計清水つめたき　　等躬

21　薪木引雪車一筋の跡有て　　そら

【式目】冬（雪車）。

【付け】

単純に芹掘をしている附近の光景を付けたと解されてきたし、それはあながち誤りではない。「雪深い北国のさま」（【正】）と見ることも納得が行く。だが、その背景には「薪の行道」からの連想があるだろう。『法華経』の第五巻「提婆品」の「即随仙人供給所須、採果、汲水、拾薪、設食」による伝行基菩薩歌、『袋草紙』上巻より引けば、

法華経を我えし事は薪こり菜つみ水汲みつかへてぞえし

を踏まえている。この歌は、法華八講の法会において提婆品を供養する際に唱えられ、人々は薪を負い水桶をになって僧たちの後から行道する。すなわち、前句の「芹掘」「清水」に対しての「薪木（たきぎ）」なのである。

【句意】

「雪の上に、薪を積んで運んだ雪車の一筋の跡が延びている」。ここに想定されているのは仏道修行者の修行であろう。作者の曽良が、『おくのほそ道』で「予が薪水の労をたすく」者として登場することを思うべきである。現実の旅において曽良の立場がそのように意識されていたことをうかがわせる。

21　薪木引雪車一筋の跡有て　　そら

22　をの〳〵武士の冬ごもる宿　　芭蕉

【式目】冬（冬ごもる）、人倫（武士）、居所体（宿）。

【付け】

付けの中心は、『類舩集』に「雪→冬籠る庵」とあるような、「雪」から「冬ごもる宿」への展開である。また、【駕】が「一筋」と「武士」の連想関係を指摘するが、『類舩集』の「一筋」からの付合語に「矢・おもひ切最後・鑓」と武士に関係する語が並ぶことからすれば、そうした詞の上のつながりも認められよう。雪車を引いて薪を運んだ者を武士としたことは動かない。一方で、古く『附合集評註』に

は「前句は北越の大雪なるべし、後句は北國の城を攻むと大軍おそひ来れども、かの大雪に馬の蹄動かすべくもあらず、むなしく武士の冬ごもりゐて、春をまつすがたにや」という注があり、【島】がそれを採用して「はかばかしき軍もできず、各武士あちこちの宿に冬籠りの持久戦に入った状態。」と、いくさの状況下の付けと見ている。しかし、「薪木」も「雪車」も「冬籠もり」もいくさに直接の関係はないので、それは行き過ぎの解だろう。

【句意】

「それぞれに、武士が冬籠もりしている家々」の意である。【高】は「山家の生活者」、【正】は「山家に生きる人々」とするが、「薪木引雪車」は「山家」のものと限らないし、山中のことと見ては19・20とねばる。雪のある武家町でよい。

【考】

曽良が武士であること、また、芭蕉と曽良との間の雪の夜の交遊を想起すべきであろう。すなわち、『続虚栗』（貞享四年〈一六八七〉刊）所収の芭蕉発句「君火をたけよき物見せん雪まろげ」を当座の話題にしながらの付合と思われる。

22　をの〳〵武士の冬ごもる宿　　芭蕉

23　筆とらぬ物ゆへ戀の世にあはず　　等躬

【式目】雑、恋（戀）。

【付け】

前句の「武士」の一人の恋の事情を付けたと見るのが自然。冬籠もる武士が恋について不案内だという「其人」の付けと言えよう。

【句意】

「世にあふ」は時流に乗って時めくことを言う。「戀の世にあはず」ならつまりは「恋が相手に受け入れられない、思うようにならない」ということ。「者」を「物」と書くのはよくあることである。「戀の」は「戀が」と読み替えても良いだろう。「筆をとり文を書くことをしない者なので、恋愛がうまくゆかない」のである。【正】のように「恋の世」を「恋愛の盛んな世の中」と説明するのは、「恋の世」という近世的な成語に引っぱられた誤解だろう。諸注さまざまに恋愛事情を想像するが、恋心を伝えるすべを持たぬ人物に恋はできないという、おおまかな一般論で解してよいと思う。

23　筆とらぬ物ゆへ戀の世にあはず　　等躬

24　宮にめされし憂名恥かし　　曽良

【式目】雑、恋（憂名）、人倫（宮）。

【付け】

『源氏物語』の末摘花の俤と【篤】が主張し【宮】【島】が賛成しているが、対して【加】は浮舟の俤だと説き、【正】が賛成している。浮舟は田舎育ちの「筆とらぬ」姫であり、匂宮に召されたという「うき名」の立つのを恐れて投身自殺を試みたのであるから、浮舟説の方に分がある。また、【加】【正】の言うとおり、『源氏物語』から直接ではなく、謡曲「浮舟」の詞章によったと見られる。前ジテの女による、匂宮（兵部卿の宮）が浮舟のもとに忍んで逢ったこと

を語る詞章に、

人柄も懐かしく、心ざま由ありて、おほとかに過ごし給ひしを、物言ひさがなき世の人の、ほのめかし聞えしを、色深き心にて、兵部卿の宮なん、忍びて尋おはせしに、織り縫ふ業のいとまなき、宵の人目も悲しくて、垣間見しつつおはせしも、いと不便なりし業なれや、其夜に扨も山住の、めづらかなりし有様の、心に沁みて有明の、月澄み昇る程なるに

とあり、後ジテの浮舟の霊のくどきに、

あさましやもとよりわれは浮舟の、寄るかたわかで漂ふ世に、浮き名洩れんと思ひ侘び、此世になくもならばやと。

とある（引用は新日本古典文学大系『謡曲百番』によった。謡曲の引用は以下同じ）。前句の人物を、男から女へ読み替えている。

【句意】

「宮に召されたという、世間の噂が、恥ずかしい」。「憂名」は謡曲「浮舟」の詞章の「浮き名」から来ており、本人にとって悩ましい世間の噂、スキャンダルの意と解する。

24　宮にめされし憂名恥かし　　曽良

25　手枕にほそき肱をさし入て　　はせを

【式目】雑、恋（句意）。

【付け】

ここも浮舟の俤と【加】は言うが、それでは三句がらみ。ほかの注者がおしなべて採用するとおり、『千載和歌集』巻十六・雑上の、

二月ばかり月あかきよ、二条院にて人人あまたゐあかして物がたりなどし侍りけるに、内侍周防よりふして、まくらをがなとしのびやかにいふをききて、大納言忠家これをまくらにとてかひなをみすのしたよりさしいれて侍りければ、よみ侍りける　　周防内侍

春のよの夢ばかりなるたまくらにかひなくたたん名こそをしけれ

といひいだし侍りければ、返事によめる　大納言忠家

契ありてはるの夜ふかきたまくらをいかがかひなき夢になすべき

という応酬が典拠であろう。「憂名恥かし」から「かひなくたたむ名こそをしけれ」を連想し、大納言忠家が周防内侍に「これをまくらに」と言いながら腕を御簾の下から差し入れた場面を付けた。周防内侍歌は『百人一首』にも採られ、俳諧でも『類舩集』に「手枕→かいなくたゝん名」があるように当時常識的な逸話であった。芭蕉がそうした著名な故事を避けたと考える必要はなく、歌そのままの引用ではなく俤の技巧を追求している点に注意すべきであろう。た

だ、忠家が「宮」ではないという不整合は、有名な逸話の利用を意図する余りに詰め切れなかったと言うべきか。

【句意】

「たまくら」と読むか、「てまくら」と読むか。『邦訳日葡辞書』によれば「たまくら」は「枕の役をするように、片方の腕を他人の頭の下においてやること。詩歌語。」であり、「てまくら」は「休息する際に、枕にすると同じようにして、頭をもたせかける手。または、腕。」である。周防内侍歌に拠るとするなら当然「たまくら」であり、「手枕にせよと、男が、女の前に、細腕を差し入れて」の意となる。貴族らしさを出すために「ほそき肱」と言っている。

【考】

同じ旅で加賀の山中温泉に至って「馬かりて」歌仙（いわゆる山中三両吟）が成るが、その21に芭蕉は「てまくら」を詠む。『やまなかしう』（可大編、天保十年〈一八三九〉刊）によれば、「銀の小鍋にいだす芹焼」の曽良句に、芭蕉はまず「手枕におもふ事なき身なりけり／手まくらに軒の玉水詠め侘」と付けを案じて、北枝に向かって「てまくら移りよし、汝も案ずべし」と勧めた。北枝も二句を示したが、結局は芭蕉の「手まくらにしとねのほこり打拂ひ」に定まった。ここで芭蕉は「てまくら」の句作りを案じているのだが、それは須賀川で「たまくら」を案じ周防内侍の故事に頼って古い付け方をしたことの反動のように思われる。歌語「たまくら」と文字面の同じ俳言「てまくら」を、恋の情趣の描写にどのようにしたら生かせるか、探っていたのではないか。拙著『風雅と笑い 芭蕉叢考』（清文堂、二〇〇四）所収「山中三両吟について」参照。

25　手枕にほそき肱をさし入て　　はせを

26　何やら事の足らぬ七夕　　等躬

【式目】秋（七夕）。

【付け】

「七夕」を用いての恋離れの句であり、かつ、秋にして次に月を付けやすくしている。前句の男女を入れ替えて取り、「枕がないので、女の細いかいなを男が手枕にしている」状況と取って、「何やら事の足らぬ」とした。折しも織り姫と彦星が出会うという恋の夜なのに、共寝の床に枕がないのである。それを「何やら事の足らぬ」とぼやかしてみせた滑稽な付け。共寝するなら互いの腕を枕にすればよいので「事の足らぬ」わけでもないのだが……という恋がらみのおとぼけを意図している。【加】はこの付けを周防内侍の七夕詠によったとするが、24と25の付けを周防内侍の著名歌によると見る限りでは賛成できない。

【句意】

「何やら、不足なことがある、今夜は七夕」。等躬は、この句で恋離れして、次句で月秋を詠む運びを気に掛けながら、俳諧的な発想であっさり曖昧に付けている。遣句（やりく）とも言える。従来の注釈の多くはこの句を七夕の夜の独り寝の寂しさと解するが、そのためには「たまくら」を「てまくら」に読み替えたと見ねばならず、「た」と「て」の音の違いを度外視してそのような読み替えをしたとは考えにくい。

26　何やら事の足らぬ七夕　　等躬

27　住かへる宿の柱の月を見よ　　そら

【式目】秋（月）、月の句、天象（月）、夜分（月）、居所体（宿）。同じ名残折オモテの22に「宿」があったが、すでに四句去っていて差し合いではない。なお、曽良の俳諧書留では、はじめ「見て」と書いて「見よ」に修正している。打越し25が「さし入て」だったことに気がついて、清書以前に修正したのだろう。

【付け】

等躬が「七夕」で秋にしたのを受けて月を詠んでいる。「何やら事の足らぬ」を、落ちぶれて貧しくなっての結果と見て、引っ越した先の家のありさまを想像した。

【句意】

引っ越し先の家には、屋根に穴があり、柱に月の光が差しているとした。これは、『山家集』下・雑（『西行全集』の松屋本書入六家集本翻刻による、ただし書入は省略した）に、

みちのくにへ修行してまかりけるに、白川のせきにとまりて、所がらにや、常よりも月おもしろく哀にて、能因が秋風ぞ吹と申けんおり、いつなりけんとおもひ出られて、名残おほくおぼえければ、関屋のはしらに書付ける

白川の関屋を月のもる影は　人の心をとむるなりけり

とある歌文をアレンジしたものと思われる。貧ゆえに転宅した人物が、西行を気取って柱に月光が差すことを自慢げに言っているという、滑稽味のある句である。須賀川の当座での、白河の関をめぐる古歌の話題を採り入れた付けと思われる。「引っ越した先の家の、柱を明るく照らしている月の光を見よ」。

27　住かへる宿の柱の月を見よ　　そら

28　薄（すすき）あからむ六条が髪　　芭蕉

【式目】秋（薄）、植物草（薄）、人倫（六条）。

【付け】

「六条」について解釈が分かれてきた。まとめると、【広】【高】は六条本願寺お剃刀説、【駕】【宮】【中】は『源氏物語』六条御息所の説、【加】は六条の河原左大臣源融説といったところであった。しかし、赤羽学氏が『俳文藝』第七号（一九七五・一二）の「俳文藝雑記帳」の中で、東京大学総合図書館本の『雪まろげ』に朱書の頭注があり、この句について「平家物語少将成経都遷ノ条曰／六条か黒かりし髪も白くなりたり／六条ハ成経ノ乳母也」とあることを紹介した。『平家物語』の登場人物、藤原成経（なりつね）は鹿ケ谷の謀議に加わり俊寛・平康頼とともに鬼界ケ島に流されるが、徳子（のちの建礼門院）の懐妊による大赦で京にもどされた。「六条」とは成経の乳母で、成経の北の方に仕えていた。『平家物語』巻三「少将都帰」には「六条は尽せぬ物思いに黒かりし髪も皆白くなり」とある。赤羽氏も頭注の説を認めて「前句の住みかえて宿の柱に月を見る人を、鬼界が島の流人丹波少将成経とみて、その留守宅の六条の乳母のことをよん

だのである。」と解釈している。この解釈に賛成するが、付け加えれば、秋にする必要から「月」に「薄」と詞で付けており、また、「月」に対しての「あからむ」でもある。

【句意】

六条の髪が白くなったことを、薄の穂の色になぞらえている。「成経の乳母の六条の髪は心労のあまり、秋更けてススキの穂が明るく光るような色になった」。『平家物語』では「黒かりし髪も皆白くなり」であった。「あからむ」は、普通に読めば赤くなったという意だろうが、この典拠を採るならば「明るく白い色になった」ではないだろうか。また、17が同じ成経の関わる故事を用いていたと思われ、繰り返しになってあまりよろしくない。須賀川の座では『平家物語』のその下りが特に話題にされていたのであろうか。

28　薄あからむ六条が髪　　芭蕉

29　剪樒枝うるさゝに撰残し　　等躬

【式目】雑、植物木（樒）。

【付け】

薄と樒の共通点は、墓地に関わりある植物ということ。『便船集』と『類船集』に、「薄→古塚」がある。樒は一名「仏前草」、仏前や墓に供えられる樹である。「薄」からそれが生い茂る墓所を連想し、切り樒を供える行為を描いたのであろう。また、【島】が「樒は六条道場からの連想か」と言うように、「六条」を六条河原院の歓喜光寺、通称「六条道場」と取り、そこから墓地を連想したと思われる。『便船集』と『類船集』に「六條→道場」がある。

【句意】

墓に供える切り樒の枝を選んでいる場面。「切り樒の中から、枝がうるさいほど茂っているものは選び残す、外しておく」という意。

29　剪樒枝うるさゝに撰残し　　等躬

30　太山つぐみの声ぞしぐるゝ　　曽良

【式目】冬（しぐるゝ）、動物鳥（太山つぐみ）。

【付け】

「切り樒」は謡曲「三輪」に使われて印象的な語である。「和州三輪の山陰に住居する玄賓」のもとに毎日樒と水を供える女がいた。

鳥声とこしなへにして、漏声と閑なる山居。柴の編戸を押し開き、かくしも尋ねきり樒、罪を助けてたび給へ。

ここの付けでは「剪樒」から謡曲「三輪」に描かれた山居を想像し、山中の鳥の声を具体的に「太山つぐみ」と定めた。「太山」は「深山樒」という樹の名を介して連想されたのではないだろうか。また、「しぐるゝ」として冬にした。言葉の上では「うるさゝ」と「太山つぐみの声」も対応している。

【句意】

深山鶫は秋に群れで日本に渡ってきて越冬する鳥である。深山を「太山」と書くのは節用集にもあって特別なことではない。『おくの

ほそ道』にも、まさに須賀川の箇所に「橡ひろふ太山もかくやと聞に覚られて」（曽良本）という用例がある。「しぐるゝ」は、「蝉時雨」（この語が当時すでにあったことは『拾花集』で確認できる）に似て、鳴き声が激しく響いてはしばらく静まるというくりかえしを表現しているのだろう。「ミヤマツグミの群れて鳴く声が、まるで時雨のように断続的に響いている」意。

30　太山つぐみの声ぞしぐるゝ　　曽良

31　□（ウ？）淋しさや湯守も寒く成（なる）まゝに　　はせを

【式目】冬（寒く）、人倫（湯守）。名残のウラに入ることを示す記号「ウ」があって然るべきところに「J」に似て下を留めずに払っている判読不明の一字がある。

【付け】

前句を山居の風情として「淋しさや」と付けた。『便舩集』に「寂（サビシキ）→山居」、『類舩集』に「淋敷（サビシキ）→山居」がある。冬をつないで「しぐるゝ」ともよく付く「寒く成」の語を出した。そうした枠組みの中に「湯守」を出したのは、やはりその座の話題として那須の温泉の経験が語られていたからだろう。ただしここの付けを那須温泉に限定する必要はない。

【句意】

温泉地で温泉の源泉や湯屋の番をする仕事が「湯守」。「さびしさを感じるよ。湯守はふだん温かな仕事ではあるが、寒くなって人の訪れが少なくなると」。

31　淋しさや湯守も寒く成まゝに　　はせを

32　殺生石の下はしる水　　等躬

【式目】雑、水辺用（水）、名所（殺生石）。

【付け】

等躬が前句の「湯」を、「殺生石」の名を出すことで那須湯本に確定させた。「湯（温泉）」から「下はしる水」は現地を知る者どうし実際的な連想で付けているだろう。また、「淋しさ…寒く成」と「殺生石」の荒涼としてものものしいイメージとがつながっている。

【句意】

「殺生石の下あたりを勢いよく流れて行く水」。殺生石は那須湯本にある。九尾の狐である玉藻の前が退治されてこの石に化したという。等躬はその伝説を謡曲「殺生石」によって意識しているのだろう。能の舞台では後ジテの登場の場面に大石が二つに割れる演出があり、そこから妖狐が「石に精（せい）あり。水に音あり。風は大虚（たいきよ）に渡（わた）る、形（かたち）を今（いま）ぞ、あらはす石の、二（ふた）つに割（わ）るれば、石魂忽ち（せきこむたちま）、あらはれ出（い）でたり、恐（おそ）ろしや」と謡って現れ出る。この「水に音あり」を思わせるように句を仕立てていると考えられる。

32　殺生石の下はしる水　　等躬

33　華遠き馬に遊行を道引て　　そら

【式目】春（華）、花の句、植物木（華）、動物獣（馬）、釈教（遊

行）、人倫（遊行）。

【付け】

芭蕉と曽良が殺生石の翌日に立ち寄った「遊行柳」を連想した付けであることは確か。謡曲「遊行柳」には西行の歌を用いての「道野辺に、清水流るる柳陰（やなぎかげ）、清水流るる柳陰、暫（しば）しとてこそ立（た）ち止（と）まり」という詞章があるので、「下はしる水」から「遊行柳」が導かれたとも言える。さらに言えば、那須野の通過に際ししばらく馬を利用したという実際の経験談を取り上げた楽屋落ちでもあろう。曽良の随行日記によれば、四月十六日余瀬から高久に向かう際に、黒羽の大関家の家老・浄法寺図書高勝の手配によって「野間ト云所」まで馬を使わせてもらっている。さらに翌々日の十八日、高久から湯本の間にも「馬壹疋、松子村迄送ル」とある。

【句意】

曽良がここで花の句を持たされた。転じを心掛けてはいようが、利用したのはやはり謡曲、今度は「遊行柳」であった。【宮】の指摘によれば、謡曲「遊行柳」で前ジテの老翁（じつは柳の精）が遊行の聖（遊行上人、特定の人物ではなく遊行宗の僧）を道案内する場面、前ジテのせりふ「こなたへいらせ給へとて、老たる馬にあらね共、道しるべ申なり、いそがせ給へ旅人」による句作りである。ただ、「華遠き」がその下にどうつながるのかが分かりにくい。「遠い花まで、馬によって、遊行を導いて」の意と考えておく。なお、【高】は「師翁その人の姿を再現してみずから感慨にふけっての付句」と解釈している。つまり、曽良が、遊行たる芭蕉を花まで案内しているという意を込めて詠んでいると見ている。【加】や【正】がそうした見方に賛意を示すが、やはりそれは深読みに過ぎるだろう。それではワキツレのはずの曽良がシテになってしまう。

【考】

謡曲「遊行柳」の「老いたる馬にあらね共」は『蒙求』の「管仲随馬」の故事による表現であるが、芭蕉は後に『おくのほそ道』において、日光から黒羽に向かう途中の出来事として、この故事を趣向としている。拙稿「「秣負ふ」歌仙注釈」（『近世文学研究』新編第二号、二〇一七・一二）参照。

33　華遠き馬に遊行を道引て　　そら

34　酒のまよひの醒（さむ）る春風　　芭蕉

【式目】春（春風）。

【付け】

『附合集評注』に、「酒の迷ひのさむるは、たゞ酔のさむるなれど、遊行をみちびくといふに、迷ひのさむるとひゞかせたる也」とある。前句の「遊行を道引て」に「まよひの醒る」が言葉の上で響き合っているというのである。それは、謡曲「遊行柳」で柳の精が柳まで遊行上人を導き、その唱える偈によって迷いを晴らすことを指していよう。その点は首肯できる。ただ、この付けでは馬子が花まで遊行上人を導き、春風に吹かれて酒の迷いが醒めたというパロディに仕立てている。「高僧の徳で（仏教的な意味での）迷いが醒める」という脈絡が期待されるところを、酒の酔いが醒めると俳諧化したのである。

【句意】

「酒の酔いによって心の迷いが生じたが、春風に吹かれてその迷いが醒めた」。酒に酔ったが醒めた、というだけのことを、「遊行柳」を利用して大げさに言っている。当座の饗応に酒が出ていたか。

34　酒のまよひの醒る春風　　芭蕉

35　六十の後こそ人の睦月なれ　　等躬

【式目】春（睦月）、人倫（人）。人倫が打越しにあって差し合いである。曽良の俳諧書留では下五を「正月なれ」と記すが、「正月」は読み取れない仮名文字の上に重ねて書かれている。当初別案があったのだろう。

【付け・句意】

「酒」と「春風」から「睦月」を出したことは確かである。そしてまた、「まよひの醒る」に対して「六十の後」の人の心境を付けている。しかし、その心境を「睦月」だとする比喩的な物言いが結局何を言おうとしているのか、はっきりしない。【駑】は「人世六十過ぎてこそ、楽しい月日がある」と取り「前句に五欲から解放されるといふ意を汲みとって附けたのかもしれない」と言う。【宮】は「論語にも「耳順」と言い、はじめて人生を喜び楽しむことができる意」と言う。【高】は「耳順」説に賛意を示し、等躬の年齢がこのとき五十二歳であったことに触れて「いやいやまだ六十にはだいぶ間がありますので、なかなか酒の上のしくじりもちょいちょい重ねますというほどの気持ちを逆に言ってみたものであったのかもしれない」と読み込んでいる。【正】は【駑】に近く「隠居する年齢と見た方が穏当」と言う。

前句の「まよひの醒る」に「六十の後」が付けていると見る限り、【宮】の指摘のように『論語』「為政」の「六十而耳順」を意識していると取るのが自然だろう。「耳順」とは「六十歳をいふ。孔子、六十にして天地萬物の理に通達し、聞くに隨つて悉く理解が出來たことからいふ。」（『大漢和辞典』）、「品性の修養が進み、聞くことが直ちに理解でき、なんらさしさわりも起こらない境地」（『日本国語大辞典』）。まさに「まよひの醒」めた境地である。「人の睦月なれ」は、この世の理に通じ正しき品性を獲得して「めでたき」人となったことを比喩していることになる。等躬の年齢を絡めた【高】説も有効だろう。【正】の説は苦しい。当時の隠居の年齢として六十は遅かろうし、隠居したからといって円満な人柄になるとは限らない。

35　六十の後こそ人の睦月なれ　　等躬

36　蚕飼する屋に小袖かさなる　　曽良

【式目】春（蚕飼）、動物虫（蚕）、居所体（屋）。

【付け】

「蚕飼」によって春を四句続けての挙句。正月を迎えるに当たって新調する晴れ着である「正月小袖」の語によって、「睦月」に「小袖」を付けている。『便舩集』と『類舩集』にも「小袖→正月」がある。同時に、六十の算賀の祝いに諸方から贈られた小袖が「かさなる」という付けの心も併せ持っている。

【句意】

等躬宅では実際に養蚕をしていたと思われ、挨拶性の強い挙句である。「蚕の棚があって蚕を飼っている建物には、祝い物の小袖が重なっている。」

【考】

曽良の俳諧書留にはこの歌仙の前に曽良の発句「蚕する姿に残る古代かな」を記している。須賀川には養蚕に関して独特の伝統的風俗があったと想像される。曽良は須賀川到着後この歌仙の始まるときに「蚕する」句を披露していたが、発句には芭蕉「風流の」句が用いられたことから、自句を挙句に応用したのであろう。さらに、曽良の発句は、『おくのほそ道』では尾花沢の条に「蚕飼する人は古代のすがたかな」の句形で置かれもした。それは後年の芭蕉の作為である。

【附記】

本稿（上）では7の芭蕉句「賤の女が上総念佛に茶を汲て」の「上総念佛」を解釈しあぐねたが、その後、謡曲「遊行柳」の冒頭でワキの遊行僧が「此程は上総国に候しが、是より奥へと心ざし候」と述べていることに気付いた。芭蕉はおそらく「遊行柳」のワキ僧を念頭に置いて、「賤の女」に「摂待」される「上総念佛」を詠んだものであろう。